

# 畢修勺と巴金

## －1920年代後期のアナキズム雑誌『民鐘』と『革命週報』をめぐって－

中国現代文学・文化研究所  
招聘研究員 呉 念 聖

### 要 旨

雑誌はアナキストたちの重要な陣地である。1927年、25歳の畢修勺は二度にわたって雑誌編集長の職に就き、筆を振るった。二度とも後任で、一度目は年の初め、拠点を広東から上海に移した『民鐘』の編集長をひき継いだ。きっかけは、2歳年下のアナキスト同志、作家デビュー前の巴金の紹介であった。二人は少なからぬ翻訳や論文を、この『民鐘』に書いている。しかし、中国情勢が激しく変化していくなかで、渡仏した巴金と上海にいる畢修勺はしだいに対立を深めていった。

二度目の編集長就任は6月、創刊早々編集長に辞められた『革命週報』を引き受け、二年あまりの戦いのスタートをきる。この雑誌の出資者は、高名なアナキスト李石曾で、いまや新しい権力側に立つ人間であった。そのため、巴金は編集長畢の寄稿要請を拒否、二人の関係は一層険悪になる。しかし、『革命週報』を通観すれば、共産党に対する批判や、国民党当局や改組派に対する批判もあり、なによりも強権政治反対、個人思想改造重視という一貫した観点のあることが見て取れる。そういうこともあって、『革命週報』は約7週間の発禁処分をうけ、畢も3日間の投獄を余儀なくされたのである。

1928年末、フランスから帰国した巴金は、一年ほど自由書店で編集者を務め、さまざまなアナキズム関係の書籍を出版した。実は、この自由書店は『革命週報』社と同じ場所にある。二人は絶交状態にありながら、ごく近くで仕事をしていたことになる。もろもろの原因から、二人の関係修復が実現したのは、1936年の春であった。

アナキズムは、本質的にすべての政府に反対の立場をとる主義である。そのため、民衆の啓発教育をもっとも重んじる。しかし、現実問題として、民衆啓発には長い時間と多額の費用を必要とする。ときには権力者の力を借りることもあり得る。既存政府や権力者との距離をどう取るかは、アナキストのみならず、政治活動を行う上で避けて通れない難題だといえよう。

### キーワード

アナキズム、畢修勺、巴金、民鐘、革命週報、自由書店

### 英文要旨

Magazines and periodicals form an important domain of expression for anarchists. In 1927, 25-year-old Bi Xiushao (畢修勺) became the editor-in-chief of two different periodicals. In both cases, he was serving as a successor to a departing editor-in-chief. He assumed the first position at the beginning of the year as editor-in-chief of *Evangel of the People*, which had just moved from Guangdong to Shanghai, thanks to the introduction of a fellow anarchist, the 23-year-old Bajin (巴金), before he had become famous as a novelist. They collaborated on quite a few translations and essays for this periodical. Amid the violent changes taking place in China at

the time, Bajin departed for France, while Bi remained behind in Shanghai, and their differences gradually deepened.

Bi entered upon his second position in June as editor-in-chief of *Revolutionary Weekly*. He struggled for more than two years in this new position. The sponsor of this periodical was the famous anarchist Li Shizeng (李石曾), who at the time stood with the KMT. As a result, Bajin rejected all of Bi's requests for essay contributions to this periodical, and the relationship between the two men became all the more bitter. Broadly viewed, the periodical criticized both the Communists and the Nationalists, opposed authoritarian government of any type, and emphasized the cultivation of individual thought. It was probably for this very reason that the periodical was closed by the authorities for seven weeks and Bi was imprisoned for three days.

Upon returning from France at the end of 1928, Bajin worked as an editor at the Free Bookstore for about one year and published various books dealing with anarchism. As it turned out, the Free Bookstore and the offices of the *Revolutionary Weekly* shared the same postal address. Although they had severed all communications, they were working near each other. For various reasons, they were finally able to repair their relationship in the spring of 1936.

Anarchism, as a system of thought, fundamentally opposes all forms of government. For that reason, it gives the greatest importance to the enlightened education of the people. However, as a practical matter, the creation of an enlightened public requires a long time and tremendous resources. Sometimes, it is necessary to borrow the power of the authorities in order to achieve this goal. How to maintain a proper distance from an existing government is a difficult issue not only for anarchists but for anyone.

## 1. はじめに

1936年春<sup>(1)</sup>、上海で、畢修勺と巴金の関係修復を趣旨とする食事会が催された。二人の不和の原因は1927年に遡って求めねばならない。

1927年は中国現代史上非常に重要な年である。前年の7月に始まった、第一次国（国民党）共（産党）合作による北伐戦争は、南の広州を拠点に東部沿海地域の上海、南京、中部地域の武漢、南昌などの重要都市を次々に掌中にし、北京の北洋軍閥を圧倒する勢いをみせた。しかし、その年の4月12日、国民党右派の蒋介石は上海で共産党員の粛清クーデターを起こし、5日後の17日南京政府を樹立したが、広州から移った、国民党左派汪兆銘らを中心とした武漢政府と対立する状況となった。同年7月15日、汪兆銘もまた共産党と決別し、南京政府と合流するに至った。8月1日、共産党は南昌で武装蜂起し、ここに国共合作は完全に破局する。国民党の内部闘争が激しく繰り返される中で、蒋介石が事態収拾に成功し権力を掌握する。28年4月8日、北伐が再開され、6月15日、北伐軍が北京に入城、12月29日、東北の軍閥張学

良が降伏を宣言する。これによって北伐は完了し一応の全国統一が果たされた。しかし29年、続いて30年と、再び内戦が起り、しかも対日関係は緊迫状態にあった。

この目まぐるしく変化する情勢の中で、中国のアナーキストたちはどのような行動をとっていたであろうか。本文では、畢修勺と巴金の二人に焦点を当てて考察することとする。二人はアナーキストの同志という間柄にとどまらず、親しい友人でもあったが、1927年初めに渡仏した巴金と、上海にいた畢修勺とは、アナーキズム雑誌『民鐘』や『革命週報』の活動をめぐって次第に意見が対立し、ついには絶交する。その過程を検証し、原因を探ろうというのが本文の主旨である。

そもそも、アナーキズムは無政府主義ともよばれているように、本質的に、すべての政府・権力に反対する立場をとっている。政府・権力とどのように対峙するかがアナーキズムの核心である。したがって、民衆一人一人の思想向上のために民衆の啓発教育を最も重視する。しかし、民衆を啓発するには、長い時間と多額の資金が必要であり、また現実問題として、時には権力者の手を借

りることもあり得ないことではない。既存の政府や権力者との距離をどう取るかは、アナーキストたちにとって避けて通れない難題であった。1920年代半ばから、旧政府、旧権力者と戦う中で、新しい政府、権力者が生まれたが、その変化に対応できず、アナーキストたちの歩調は乱れた。アナーキズムは20世紀の中国革命の中では、槿花一朝の夢のようなものといえるかも知れない。その頃畢修勺、巴金らの行動も政局に大きな影響をあたえたとは思わないが、しかし彼らは筆一本で必死に自分の意見を世に訴え、おのが主義主張を貫こうとするあまり、ときには過激な言葉で相手を傷つけ、友情（愛情に置き換えてもいいが）と主義（打算ではない）との間で揺れ動き、悩んだ。この若き日の経験があったればこそ、後年、作家巴金が生まれ、またゾラの翻訳家畢修勺が誕生したといえるかも知れない。

なお、巴金に比べて畢修勺に関する研究はまだ少ないため、本論では紙面の許す限り、畢関連の基礎データを明示しておきたい。

## 2. 『民鐘』で繋がる二人

『民鐘』は1920年代の重要なアナーキズム雑誌である。1922年7月1日、広東省の新会で黎健民<sup>(2)</sup>によって創刊され、27年7月25日まで計2巻23期刊行された。第1巻は計16期、第2巻は計7期（そのうち4期と5期、6期と7期は合併号）。

### 2.1. 巴金は重要な寄稿者

正確にいうと、『民鐘』に寄稿したのは巴金ではなく、芾甘である。いまでこそ、巴金という名前は世に広く知れ渡っているが、1920年半ばには、巴金という名前はまだ存在しない。巴金（1904－2005）本名は李堯棠。芾甘は字である。当時、彼の文章には多く芾甘という署名が使われており、その知名度はアナーキストの圏内にとどまっている。巴金というペンネームがはじめて用いられたのは1928年フランスで書かれた処女作『滅亡』で

ある（1929年『小説月報』に発表）。

1924年8月1日刊『民鐘』第1巻第9期以降、巴金は頻繁に寄稿している。編著13篇、訳8篇<sup>(3)</sup>、署名はすべて「芾甘」である。

もちろん、『民鐘』以外にも、『国風日報』副刊『学匯』、『時事新報』副刊『学燈』、『洪水』などにも投稿しており、1925年9月には、衛惠林<sup>(4)</sup>、沈仲九<sup>(5)</sup>、黎健民らとともに『民衆』を創刊した。

### 2.2. フランス帰りの畢修勺が編集長を継ぐ

#### 2.2.1. フランス滞在中のアナーキズム活動

畢修勺（1902－92）浙江省臨海の人。ゾラの翻訳家として知られるが、1920年代後半もっとも健筆を揮ったアナーキストの一人である。貧しい農家の出身で、1920年5月に勤工儉学運動<sup>(6)</sup>ブームの中でフランスに渡る。同じ船に、彼の小学校の先生陳沢孚<sup>(7)</sup>や同級生の朱洗<sup>(8)</sup>ら130人余りが乗っていたという。<sup>(9)</sup>

渡仏後、畢修勺は、陳延年、陳喬年兄弟<sup>(10)</sup>や李卓<sup>(11)</sup>の影響でアナーキズムに接近し、のちにアナーキズム雑誌『工余』に加わり彼らと行動を共にした。

『工余』は1922年1月15日に創刊され、23年7月の第19号までは毎月刊行されていたが、その後は不明である（残念ながら現在のところ、筆者が確認できたのは、刊行日不明の第2巻第3号、24年9月11日刊の第3巻第2号のみである）。その中心人物は当初は陳延年、陳喬年であったが、22年半ば、陳兄弟が共産主義に転向してからは李卓が中心となる。その活動は、畢修勺の回顧文『我信仰無政府主義的前前後後』（1984）によると、陳沢孚、朱洗、羅承鼎<sup>(12)</sup>、郭頌銘<sup>(13)</sup>、段振寰<sup>(14)</sup>、曾向午<sup>(15)</sup>などもよく来ていたという。

筆者の現時点の調査によると、『工余』に掲載された畢修勺の文は次の通りである。

碧波「全法蘭西（フランス）無政府主義大会紀要」、1923年1月31日刊第13号、

碧波訳「共産党裁判官前之無政府党毛沙諾夫斯基（モシャノフスキ？）的演説」、23年2月

2 日刊第14号、

碧波訳 A. L. Conslandse 「法西斯主義与波爾維克主義」(ファシズムとボルシェビズム)、23年7月刊第19号、

震天訳クロボトキン「革命政党之少数」、同上、「克魯泡特金(クロボトキン)夫人談話」、第2卷第3号、

震天訳クロボトキン「戦争」、24年9月31日刊第3卷第2号。

碧波と震天は畢の筆名である。発表時期は創刊一年後であり、内容はほとんど翻訳であるから、当時、畢修勺はまだ理論学習の段階にいたものと推測される。

1921年7月1日、中国国内では共産党第一次大会が開かれる。同じ頃、フランスでも周恩来らによる共産党活動が活発化する。22年6月、中国少年共産党がパリで成立、同年8月1日機関誌『少年』が創刊された。編集長は陳延年であった。『工余』と『少年』(24年2月1日に『赤光』に改名)はしばしば論戦している。

畢修勺はもう一つの雑誌作りにも関わっていた。留法(滯仏)勤工儉学生總會発行『勤工儉学週刊』である。1923年初めに創刊され、7期刊行後休刊。2・3ヶ月後の4月中旬頃再刊された。再刊後の編集メンバーは上述した『工余』のメンバーと重なっており、代表者は陳沢孚、ほかに畢修勺、羅承鼎、段振寰、郭頌銘、李卓らがいた<sup>(16)</sup>。

畢修勺の回顧(1984)によれば、彼は当地のアナーキズム組織に加わって、理論学習をしたり、メーデーにはフランスの同志とともにデモ行進をしたこともあるという。1922年、李卓の紹介でアナーキズム理論家ジャン・グラヴ<sup>(17)</sup>と会い、その後しげしげグラヴ邸に足を運び、直接教えを受け、帰国後も文通が続く。23年2月21日前後、パリ近郊のColombesの旅館で、日本から来ていた大杉栄と合い、そのときの大杉の仏語中訳を担当したりもした<sup>(18)</sup>。23年秋、フランスに赴き、グラヴ邸に泊まっていたクロボトキン夫人に会う。その訪問記は『工余』第2卷第3号に掲載さ

れている。

フランス滞在は、間違いなく若き畢修勺に大きな影響を与えた。歴史的にみれば、アナーキズムはすでに衰退期に入っているが、中国からやって来た畢修勺にとってはなお魅力に満ちあふれていた。畢はアナーキズムの発祥の地でその理論を学び、理論家に接し、活動に参加し、さらにアナーキズム的傾向をもった作家ゾラの作品に出会い、その翻訳を自分の一生の仕事にすることを誓った。さらに、共産党との接触や論戦を経験して、不信感を抱くようになっていた。これらフランスでの経験のすべてが彼のその後の人生を大きく左右したと思われる。

## 2.2.2. 上海『民鐘』の活動

1925年8月、畢修勺はフランスから帰国、しばらく故郷の母校回浦小学で国語を教えていたが、26年秋、夏休みで故郷に戻った陳沢孚(当時は上海立達学園でフランス語を教えていた)と一緒に上海に行く。陳の住居に寄宿し、ゾラの翻訳に着手した。冬、四つの短篇による『左拉(ゾラ)小説集』(陳沢孚と共訳)の原稿を鄭佩剛<sup>(19)</sup>の上海江湾出版合作社に渡し(表紙デザインは豊子愷<sup>(20)</sup>に依頼)、翌春刊行される。これが中国初のゾラの作品集である。

1926年末から『民鐘』に畢修勺の文章が見られるようになる。

碧波訳亜齊諾夫「社会革命的眞道路」、26年12月15日刊第1卷第16期、

震天訳クロボトキン「代議政府」、27年1月25日刊第2卷1期、

震天「現社会的矛盾—給一個青年的信(ある青年に与える書状)」、同上

震天「巻頭語 記念克魯泡特金」、27年2月25日刊第2卷2期、

震天「人類社会的毒菌」、同上、

震天訳「代議政府」(続)、同上、

鄭鉄「種我們自己的園地」(我々自身の土地を耕す)、同上

鄭鉄「卷頭語 記念師復先生」、27年3月25日刊第2巻3期、

震天「従記念師復談到無政府主義」（師復記念から無政府主義まで語る）、同上、

震天訳「代議政府」（続）、同上、

震天訳C. A. Laisant「近代的工業」、同上、

震天「人格的宣伝」、1927年5月25日刊第2巻4、5期合刊号、

「震天与法国無政府主義者格拉佛（グラウヴ）的通信」、同上、

「震天与君毅的通信」、同上。

鄭鉄も畢の筆名である。合わせて文9篇、訳5編。この時期、このように頻繁に書いているのは、彼が『民鐘』編集長だったからであろう。

畢の回顧（1984）によれば1926年後半頃、「私と芾甘は頻繁に往き来していた。彼が最初に訳した『麵麩略取』の巻頭のルクリュの序言は私が訳したものだとし、彼が1927年フランスに渡る際の、パスポートやビザの手続きからフランの両替、船の切符の手配まで、どれも私が彼を助けて奔走したのである。また私が『民鐘』を引き継いだ時も彼が私を広東の黎健民に紹介したのである。」（嵯峨1992：438）

芾甘つまり巴金は1926年12月、上海でクロボトキンの『麵麩略取』を訳し終えた。27年1月25日刊『民鐘』第2巻1期に、広東民鐘社からの芾甘訳クロボトキン『麵麩略取』の出版予告が載っている（1927年11月に自由書店より初版）。

ここでいうルクリュはエルゼ・ルクリュ<sup>(21)</sup>であり、のちの畢修勺とも関係の深くなる人物である（本文の「おわりに」を見よ）。

畢修勺が編集長となり、民鐘社は広東から上海に移り、その後、何種もの単行本（頁数の少ない小冊子も含める）を出版した。例えば、震天・凌霄・徐蘇中・三木・敬・PP・碧波訳『克魯泡特金全集』第1集、芾甘訳阿里斯『科学的無政府主義』、震天訳多拿爾『無政府主義入門』、恵林『工団主義』、天心（沈仲九の筆名）『敬告中国青年』、震天訳柏徳禄『時的福音』（民衆小叢書第5種）

など。

その中の一冊が1927年4月刊、恵林・芾甘・君毅『無政府主義与实际問題』（無政府主義与实际問題）である。

### 2.3. 『無政府主義与实际問題』の公刊問題

『無政府主義与实际問題』の公刊は、アナキストの中で大きな波紋を呼び、また畢巴の仲違いの原因ともなった。

上記の畢回顧でも触れられているように、1927年1月15日、巴金は上海を發ち、憧れのフランスへ向う。そのとき、巴より4歳上の衛恵林も同行した。衛恵林、つまりこの本の作者の一人、恵林である。彼も『民鐘』の寄稿者であり、そして巴金と同様『民衆』の發起人でもある。巴金にとっては「お兄さん」のような存在であった。

もう一人の作者、君毅は、呉克剛<sup>(22)</sup>である。君毅は字。1924年3月、師沈仲九とアナキズム雑誌『自由人』を創刊。翌年フランスへ留学し、滞在中だった畢修勺と親交があった。巴金とも文通していた縁で、来仏した巴金、衛恵林を出迎え、二人の面倒をみた。

『無政府主義与实际問題』はこの三人がそれぞれの意見を發表、一冊にまとめたものである。完成時期はおそらく巴、衛がフランスに到着してまもなくの3月中と思われる。原稿は上海にいる畢修勺に送られ、4月に民鐘社より出版された。

それぞれの観点の相違については、陳思和の『人格的發展 巴金伝』に的確な分析がある。

無政府主義者は実際の革命運動に参加し、その中で徐々に無政府主義の理想を広げていくべし、という点においては、三人の意見は一致している。ところが、どのように参加するかとなると、見方がやや異なる。衛恵林は、無政府主義者が革命運動に参入し、現有条件のもとで自分の理想を具現化する。そしてできる限り平民の幸福や自由拡大をめざすとしている。巴金も基本的にはこのような観点をもっているかにみえる。…が、無政府主義者が国民党と連合する

べきか否かについては、彼の言い分は不鮮明で、この問題に関しては実際の状況に応じて行動していいとのみ言っている。しかし国民党参加についてはっきり反対を表明している。呉克剛の姿勢はもう少し柔軟で、彼の結論は、国民党外でこの革命運動に積極的に参加し、徐々にこれを平民化し無政府主義化する、もし事実上こうしたことが不可能であれば、国民党内部に入ってこれらの目標を実現するというものである。(陳思和1992：95.和訳は筆者による)

問題の核心は、北洋軍閥を打倒するために、共産党員は国民党に入って国共合作をするのに対して、アナキストはどういう政治姿勢をとるべきか、つまるところ、アナキストは国民党に入るべき否かということである。

第一世代アナキストの代表的人物呉稚暉<sup>(23)</sup>は早くも、1924年5月25日『中国国民党週刊』第22期に「呉稚暉致華林書」<sup>(24)</sup>を發表し、無政府党であれ、共産党であれ、国民党であれ、程度の差こそあるものの、すべてみな革命党であり、なかでも無政府党がもっとも徹底しており、共産党はその次、国民党はもっとも現実的であるという見方を披瀝している。その文章に編集者は「勸急進派都進国民党」(急進派はみな国民党に入るよう勧める)という副題をつけている。

それに対し多くのアナキストが憤慨し、反論しているが<sup>(25)</sup>、北伐戦争の進展につれて、立場を変えた者も少なくない。例えば、呉克剛の『無政府主義と實際問題』での発言である。1927年5月刊『民鐘』第2巻第4、5期合刊号に掲載された、27年2月4日に同氏が君毅の名で震天(畢修勺)に宛てた書簡の中でも同じ立場を表明している。同号の、それに対する震天の返信には次のような意見が述べられている。

私は、我々が数年前に呉稚暉先生の「凡そ無政府党はみな国民党に入るべし」という論調に反撃したが、それが、我々がなすべきことであり、客観的にも原理的にもいささかも間違っていないといまもお確信している。…貴殿は、

貴殿が三年前に『自由人』で発表した意見は間違っていたと認めているが、それはあなたの正直な気持ちであろう、だとしても、貴殿の現在の意見もまた間違っていると私は思う。私達は国民党に対して不合理な攻撃はしない。これが我々の取るべき態度である。しかし呉大先生のあの論調には、これまでずっと賛成することができなかった。(葛1984：739.和訳は筆者による)

本文の冒頭にも書いたが、4月12日、上海クーデターが起こり、蒋介石の反共姿勢だけでなく、その強権政治の一端が垣間見えてきた<sup>(26)</sup>。そのとき、『無政府主義と實際問題』が公刊されたことに、アナキスト内部から激しい非難が起こった。巴金は、その非難が的外れだと反論すると同時に、公刊そのものにも憤慨し、一年経ってもその怒りは収まりそうもなかった。1928年4月刊『平等』<sup>(27)</sup>第1巻第10期に、彼は「答誣我者書」(我を誣れる者に答える書)を發表し、当該書の公刊についてこう述べている。

私たちがこの文章は發表しないと主張したにもかかわらず、私たちに連絡もなく勝手にこれを小冊子にした。このような行為は私たちの文章を利用して私利私欲を図らんと意図したものにはほかならない。この場を借りてわたしはこのような小冊子の出版に反対する態度を表明する。(巴金2000：178.和訳は筆者による)

もっとも、この文章の發表は『無政府主義と實際問題』公刊の約1年後で、その間のいろいろな状況変化も考慮に入れなければならない。新しい状況の一つは『革命週報』の発行である。

### 3. 『革命週報』をめぐる対立

『革命週報』は1927年5月に上海で創刊、1929年9月1日終刊まで、計110期、そのうち、39と40、49と50、109と110は合刊号である。第5期まで編集長は沈仲九、その後は畢修勺である。

### 3.1. 畢修勺再び編集長を受け継ぐ

1926年秋、畢修勺は友人とともに、呉稚暉宅を訪ねたことがある。呉の紹介で、北平にいる李石曾<sup>(28)</sup>に書簡を送った。27年3月下旬、李石曾は畢が開いたフランス語学校を訪れ、今後、アナキズム運動に関連する仕事に手を貸してほしいと頼み、畢はこれを承諾する。

4月上旬のある日の午後、当時25歳の畢修勺は呉稚暉(62歳)、李石曾(46歳)、匡互生<sup>(29)</sup>(36歳)、陸翰文<sup>(30)</sup>(37歳)の集まりに参加、労働大学<sup>(31)</sup>や『革命週報』の創設について討論した。そこで、労働大学労工学院長や『革命週報』雑誌編集長は当時まだ日本にいた沈仲九(40歳)にやってもらい、雑誌に必要な経費は李石曾が調達するという事になった。(畢1984)

ところが、沈仲九は『革命週報』の編集長を1ヶ月余りでやめてしまい、そのポストはまたも畢修勺が引き継ぐことになった。これより二年余り彼は編集長の職にあった。その間、畢は精力的に文章を書いた。110期のうち、第71、73、74、75期は未見であるが、計169篇(第6期以降の編者の7篇を含めて)を発表している。そのうち、文は106篇、翻訳は63篇。使った筆名は碧波、震天、修勺、修平、宗緑、王洛、震、迹影がある<sup>(32)</sup>。

本論の趣旨からすれば、畢修勺掲載文の全リスト<sup>(33)</sup>を明示すべきであるが、その量があまりにも膨大であり、紙幅の関係上やむを得ず、数点を引用するにとどめる。

彼の著作は、理論書の翻訳以外に、論文が多数あり、その多くは時局に即して共産党や改組派を批判したものであり、国民党政府については擁護論と批判論の両方がある。しかしなんと云ってもその中心はアナキズムの宣伝である。

例えば、第5期所載の碧波「精神的革命」では、革命者の最も大切な仕事は、やはり心の改造である。革命者は財産や地位に惑わされず貧賤にも屈しないという精神を身につけてはじめて周りの悪環境に抗することができる。さもなければ、時代に流されてしまう…人類の最も進歩

した状況は、支配欲や占有欲をなくし、身分の上下もなく、貧富の差もなく、互いに親しみ愛し合い、平和で自由に暮らすことである。これは革命の要諦である。これが我々がやるべき革命である。(坂井1994：第1巻146.和訳は筆者による)

第26期所載の碧波「更進一層的革命」(なお一層の革命を)では、

我々の革命は個人の頭の中から始め、それから徐々に社会の深層へと広げていく。頭の中の革命は制度革命の前提条件である。我々は、非善良な社会が善良な人間を生み出すとは信じていないし、ましてや、非善良な人間が善良な社会を作り出せるとも信じていない。社会環境を変えることはもちろん必要だが、個人の心を変えることこそより重要である(坂井1994：第3巻168-169.和訳は筆者による)

と書いている。

### 3.2. 巴金の寄稿拒否

『革命週報』に原稿を寄せるよう、畢修勺は巴金に書簡を送ったが、断られた。

半世紀後、畢修勺(1984)は当時のことを反省も込めて振り返る。

フランス語専修館を始める前の一時期、私と芾甘は頻繁に往き来していた。…その頃の我々の関係は悪くなかったのである。私は『革命週報』の主編になると、彼に手紙を書いて原稿を書いてくれるよう依頼した。彼の返信は私を驚かせた。私が李石曾らと合作しているのは、すでに「墮落した」ことだというのである。私は怒りはしなかった。自分という人間は自分が一番よく知っているからだ。不思議なのは、彼という人間が、一人の同志、友人に対して、かくも早く態度を変え、絶交状すら書けるということだった。これは思いもよらぬことだった。しかし、私は思った。彼は私が国民党の要人と付き合い、協力しあっていることを咎めているのだ。無政府主義の立場からするなら彼の正確な

見解には敬服しなければならない。私は内心些か不安になってきた。(嵯峨1992: 438)

この「絶交状」は未見だが、同時期に巴金がエマ・ゴールドマンに与えた書簡の、国内情勢に関する論述は参考になると思う。畢が『革命週報』編集長を引き受けたのは6月初め頃だから、フランスにいる巴金に原稿依頼の書簡を送ったとして、それに対する巴金の返信は6月半ば以降になろう。巴金のエマ・ゴールドマン宛書簡は7月5日に書かれたものである。

先に述べた呉稚暉とその同志たちは南京政府で指導者となっています。この間、我々の殆どの同志は民族主義者に協力しています。呉稚暉の同志である李煜瀛は、南京政府はブルードンの理論に、漢口政府はマルクスの理論に賛成していると述べています。もちろんこれは馬鹿げた考えです。彼らが発行している『革命週報』には我々の一部の同志も文章を書いています。<sup>(34)</sup>

約4ヶ月後の11月5日、巴金はフランスから『革命週報』に「寄革命週報編者の信」(革命週報編集者に送る書簡)を送り、自己の『革命週報』の主張に反対する態度を明確に示した。その原稿は同年12月18日、25日刊『革命週報』第34、35期に連載されている。

その冒頭に、

編者先生：私はかつて『革命週報』の主張に反対していました。現在も反対しています。——わたしも無政府主義者ですから。

続けて、

私はかつて『革命』を攻撃したことがありましたが、今後もまた攻撃するかもしれません。しかしながら、私は貴殿に、貴殿たちの書いたサッコとヴァンゼッティに関する文章には非常に共感を覚えたと言わねばなりません。私のみならず、もしサッコとヴァンゼッティ二人がまだ存命しているなら、彼らも貴殿たちに感謝したいと思われま。なぜならば、貴殿たちは、ヴァンゼッティが私に言ったように、黙々とあ

の二人の殉教者の情感に共鳴し、彼らの命を守り、彼らの自由を勝ち取り、彼らの無罪を証明し、彼らの信仰を弁護しているのですから。…

この状況下で、『革命』の「サッコとヴァンゼッティ記念号」を読んで感動せずにいられませんでした。(坂井1994: 第4巻121-122.和訳は筆者による)

と書いている。

ここにいう記念号は『革命週報』第19期であろう。そこに碧波(畢修勺)が8月28日黄昏に書いた「哭薩哥凡齋蒂」(サッコとヴァンゼッティに哭す)や編者の「薩凡記念号巻頭語」などが載っている。

実は、巴金はもう一度『革命週報』に投稿している。それは彼が1928年12月帰国してから、1929年1月13日、20日刊『革命週報』第79、80期の「通信与討論」の欄に春風の筆名で書いた「替巴枯寧洗一洗不白之冤」(バクーニンの濡れ衣を晴らそう)だった。

思うに、巴金が反対していたのは、『革命週報』創刊当初の南京政府寄りの姿勢であり、畢修勺が、新しい権勢側についたアナーキスト李石曾らの力を借りて『革命週報』を運営していたことに対してであろう<sup>(35)</sup>。

### 3.3. アナーキズム専門誌の終焉

1928年6月4日、畢修勺は妻蔡玉燕とともに逮捕され、呉稚暉の奔走によって三日後に釈放された。そのへんの事情は畢修勺の「鉄窓(牢屋)風味」(『革命週報』第52～54期)に詳しく書かれている。

実は、それに先んじて、5月12日に『革命週報』編集部が当局に閉鎖された。その日、畢修勺はちょうど出かけていて無事だったが、そこにいた編集者の黄子方<sup>(36)</sup>が警察に連行され、その後、畢の奔走により釈放された<sup>(37)</sup>。

7月、李石曾がフランスから上海にもどり、約7週間中断された『革命週報』はようやく復刊した。編集部は江湾からフランス租界地内に移っ



た。

その後、『革命週報』は1年ほど続いたが、李石曾の意向もあって、9月1日刊第109、110合刊号をもって終了した。畢修勺が「本報同人」の名で8月25日に書いた「与読者告别」（読者に別れを告げる）では「本誌の目的は共産党の誤りを正し、旧社会の罪悪を排除し、革命の真の価値を拡大発展させ、中国の民衆に自ら解放を求める自覚を得させること」であり、「本誌は共産党が猛威を振るったときにも死せず、また北伐勝利の日にも死せざるに、なんと全国が統一なり、訓政が始まった今死すとは、些か奇妙ではなからうか。」（葛1984：861-864.和訳は筆者による）と直言してはばからなかった。それから、『革命週報』を死に至らしめた要因を5つ挙げている。政府に反対したこと、独裁者を敵視したこと、政府の欺瞞と偽りを暴いたこと、愚民政策を攻撃したこと、平和を愛し戦争に反対したことであると。

現在中国の代表的な論評は『革命週報』は反動派であると断じている（蔣1991：284-287）。日本の研究者の中にも『革命週報』は「反共を意識した典型的な国民党アナキストの刊行物」（山口2008：48）であり、「国民党政権の安定に『投機』していく姿勢は否定できない」（坂井1994：別冊20）というような意見が大半を占めているようである。果たしてそうであろうか。国民党か共産党かという二律背反の呪縛を脱し、原文の、一層の読み込みが必要ではないかと筆者は思っている。

### 3.4. 自由書店

『革命週報』は革命週報社によって発行されているが、そこから『革命週報』以外にも、1928年から29年にかけて、革命小叢書11種などが刊行されている。それはほとんど『革命週報』（一部は『工余』）の掲載文を再編集したものである。その第2種『論無産階級専政』、第4種『分治合作問題討論集』、第6種『巴枯寧の三演説』、第9種『革命政府』、第10種『代議政府』、第11種『近代国家』は畢の著作か翻訳である。28年12月刊『一個貧農

子的話』は、畢修勺の『革命週報』掲載文から60余篇を選んで一冊にまとめたものである。

しかし、『革命週報』合本の出版元は革命週報社ではなく、自由書店であった。『革命週報』合本1（第1～10期）は1927年7月に、合本2（第11～20期）は1927年8月に、合本3（第21～30期）は1927年12月に、合本4（第31～40期）が1928年3月に自由書店より刊行された。

では、自由書店と『革命週報』とはどういう関係にあったか。畢の回顧（1984）によれば、

1927年、朱永邦（楽夫）がフランスから帰り、彼の責任で無政府主義関係の書籍を出版しようと提案したので、私も賛成した。私はこの考えを李石曾に告げ、意見を求めたところ、彼も同意して1000元寄付したので、これに『革命週報』の僅かばかりの売上げ金を加え、出版基金とした。我々は自由書店の名前で、まず芾甘（巴金）の訳した『麵麴略取』を出版した。売行きはよく、続けて『国家論及其他』『克魯泡特金学説概要』『革命的路』などを出版した。『革命週報』と自由書店は各々独立しており、自由書店の仕事は朱永邦が責任を持った。私が翻訳したイタリアの無政府主義者マラテスタの『珈琲店談話』も自由書店から出版された。（嵯峨1992：438）

朱永邦は1919年10月フランスに渡った勤工儉学生である。フランス滞在中、畢修勺とも交際があった。

上述した『革命週報』1928年5月12日事件は、同年6月1日『申報』の「上海市政週報」（毎週金曜日）に報道されている。表題は「市公安局近聞誌要」の「查封江湾自由書局」である。

江湾自由書局は、無政府主義書籍、例えば『克魯泡特金学説概要』『麵麴略取』『近世科学和安那其主義』及び『国家』『黒光』『革命』などの刊行物を発売、傲慢な言論、ほしいままの誹謗、革命を破壊し、党国に危害を加え、かつて国民政府軍事委員会が各省政府に販売禁止するよう通知していたが、該社は大胆にも禁止令

に逆らい、刊行を継続したため、わが公安局が軍事委員会の訓令に従い、動乱の芽を摘むように該書局を閉鎖する。直ちに人員を派遣し、五区五所にも閉鎖に協力するよう命じた。問題の慎重処理を期して、淞滬警備司令部に同部の人員も立ち会うように要請した。該書局を封鎖するとき、その責任者、共産首領畢修勺はすでに気配を感じて逃げ去っていたが、各種の無政府主義書籍が多数発見され、容疑者黃丕徳・黃子方・龔秉元を逮捕した…（和訳は筆者による）

この自由書局とはつまり自由書店のことであり、逮捕された黃子方は自由書店の編集者で、他の二名は雑役係りであった。

ここで言及されている『麵麩略取』とは、1926年12月に芾甘が訳し終えて、本来民鐘社から刊行する予定であったが、27年11月に克氏全集第2巻として自由書店より刊行されたものである。『国家』とはおそらく旅東・凌霜・徐蘇中・震天・敬訳クロボトキン著『国家論及其他』のことで、克氏全集第1巻として同じ27年11月に刊行されている。『近世科学和安那其主義』は凌霜・震天・天均・今悟訳で、克氏全集第3巻として28年1月に、『克魯泡特金学説概要』は芾甘編訳の柏克曼らの論文集で、自由叢書第1種として28年2月に刊行されている。『革命』は『革命週報』のことであろう。ただ『黒光』については不明。

警察側からすると、自由書店は出版元であり、『革命週報』はその出版物の一つにすぎないと考えていたようだ。事実、『革命週報』社と自由書店とは同じ場所にあった。看板の名はともかく、雑誌部門は畢修勺が、書籍部門は朱永邦が責任を負うという関連会社である。1928年12月上海に戻った巴金は、翌年初めから自由書店で編集者として働いた。自由書店からは上記以外にも多くのアナーキズム関係の著訳書を出版されている。29年1月には巴金の編集による、書評や広告を主とする『自由月刊』も出されている（5期まで）。問題の『無政府主義与实际問題』は、別の意味で当局に問題視され、30年2月に発禁になった。そ

の頃、自由書店もまた終焉をむかえたようである<sup>(38)</sup>。

#### 4. おわりに

上述したように、巴金は1928年末帰国してから自由書店と密接な関係を持ち、少なくとも、『革命週報』終刊の29年9月まで、畢修勺の近くで仕事をしていた。その間、関係修復の機会もあったにちがいないが、実現することはなかった。結局、30年4月、畢修勺は再度渡仏する。今度は北平研究院李石曾によってエリゼ・ルクリュ『地人論』の翻訳のため派遣されたものである。帰国の途についたのは34年11月であった。同じ34年11月、巴金は日本に渡り、35年8月、文化生活出版社編集長に就任するために上海に戻る。

文化生活出版社は、二人の和解に大いに関係があった。同社は35年5月に、呉朗西<sup>(39)</sup>等によって旗揚げされたが、すぐさま日本にいる巴金に、編集長の就任要請の手紙が送られた。そのとき巴金はすでに作家として多くの読者に支持されていた。文化生活出版社も多くの作家や翻訳家によって支えられていた（呉朗西1982:195）。

そのうちの二人、馬宗融・羅世弥夫妻<sup>(40)</sup>が1936年春、畢修勺と巴金の和解のために食事会の開催を呼びかけた。

翻訳家馬宗融は1920年代前半のフランス留学生で帰国後、上海でフランス文学の翻訳に従事。1929年巴金と知り合う。同年9月再度フランスへ、33年秋までの滞在期間に、畢修勺と家族ぐるみの付き合いをしていた。帰国後、上海拉都路（現襄陽南路）敦和里21号に住み、巴金と親しく付き合っていた。畢修勺が帰国し彼もまた敦和里に居をさだめた。馬家にほど近い44号であった。

出席者は文化生活出版社社長の呉朗西ほか、吳克剛、曾向午、許貺吾<sup>(41)</sup>である。

吳克剛は上述したように、畢、巴二人の親友で、中国公学時代呉朗西の一年先輩である。当時李石曾の世界社で『世界学典』の編集に参加していた

が、文化生活出版社『戦時経済叢書』の編訳責任者も務めていた。

曾向午は前にも言及されているが、1920年代前半フランスで畢修勺と一緒に『工余』活動をしてきた友人で、許貺吾もそのときフランスにいた。

畢修勺は李石曾の援助で、エリゼ・ルクリュ『地人論』（200万字）翻訳の最終稿をまとめ、文化生活出版社より刊行の準備にかかっていた。

これらの友人たちに囲まれ、畢修勺と巴金は和解した。

一年後、日中戦争が全面的に勃発し、国民党と共産党は再度合作し、1938年春、武漢で陳誠<sup>(42)</sup>は国民党軍事委員会政治部長に、周恩来は副部長に就任、政治部第3庁には郭沫若庁長以下、多くの共産党系または共産党シンパの知識人が集まった。畢修勺は陳誠の連絡を受けて武漢に赴き、『掃蕩報』<sup>(43)</sup>編集長に就く。同年9月、巴金は武漢に約1ヶ月滞在した。その間、畢修勺は巴金に陳誠からの要請を伝えたが、巴金はそれを拒否した。陳誠の要請は、抗日戦争の前線を視察してルポルタージュを書いて欲しいというものだった。

奇しくも、十数年後、巴金の前線視察は現実となったが、それは抗日前線ではなく、抗米（国）援朝（鮮）の前線であった。しかも二度も。1度目は1952年3月から10月まで、2度目は53年8月から54年1月までで、多くの随筆を残している。

一方、畢修勺は1954年1月に投獄され、名誉回復されて自由の身になったのは1979年6月である<sup>(44)</sup>。その頃、巴金は『随想録』を発表し始めている。文化大革命によって10年間禁じられた彼の筆は重く、涙と血が滲むものであった。

フランスを發って帰国するが、同じ11月に巴金は日本に渡り、1935年8月に帰国したのである。同回顧文では、食事会のときに『進化』雑誌の創刊の話が出たという。『進化』創刊号は1936年5月8日に刊行され、そこに畢も巴金も寄稿している。種々の状況を総合して、1936年の春だと判断した。

- (2) 黎健民は広東新会の人。広東大学法科で学んだ。『民鐘』を主催したほか、1925年9月、巴金らと『民衆』を創刊。32年新会で西江郷村師範学校の創設に関与。33年頃、新寧鐵路工人子弟学校校長。
- (3) 『民鐘』第1巻第9期（1924年8月1日）：「大杉栄年譜」、第10期（25年1月1日）：「『欠夾』－布爾雪維克的利刀」（Cheka－ボルシュヴィキのカミソリ）、訳ゴールドマン「瑪麗亞司坡利多諾瓦的迫害事件」（マリア・スピリドノヴァの迫害事件）、第12期（25年7月）：訳ベルクマン「俄羅斯的悲劇」（ロシアの悲劇）、第13期（25年9月）：訳ブルードン「財産是什麼？」（財産とは何か）、「芝加哥の惨劇」（シカゴの惨劇）、第14期（26年1月）：「東京の殉道者」（東京の殉教者）、訳阿利茲「科学的無政府主義」、訳ブルードン「財産是什麼？（一続）」、訳ロッカー「近代労働運動中の議会活動観」、第15期（26年6月）「俄国虚無党人的故事」（ロシアのニヒリスト物語）、訳阿里資「無政府主義之社会学的基礎」、訳ブルードン「財産是什麼？（二続）」、「雜感」、第16期（26年12月15日）：「無政府主義的階級性」、訳マラテスタ「科学与無政府主義」、「法国無政府党人的故事」（フランスのアナーキスト物語）、第2巻第1期（27年1月25日）：「断頭台上」、第2期（27年2月25日）：「断頭台上」（続）、第4、5期合併号（27年5月25日）：「断頭台上」（続）、第6、7期合併号（27年7月25日）：「無政府主義与恐怖主義－復同志的一封信」（アナーキズムとテロリズム－同志への返信）、「断頭台上」（四）、「死囚中の六年－薩珂与凡宰特果然会被殺麼－」（死刑囚の六年間－サッコとヴァンゼッティは本当に殺されるのか）。
- (4) 衛惠林（1900－92）山西省陽城の人。社会人類学者。1919年日本に留学、22年早稲田大学第二高等学院卒業、23年帰国。在日中、アナーキズム運動に参加。25年夏、盧劍波らと上海工団自治連合会を成立、秋、巴金らと『民衆』を創刊。27年1月巴金とともにフランスへ。30年帰国後、上海の立達学園や泉州の黎明高級中学で教える。31年巴金らと『時代前』を創刊。同年、南京中央研究院社会科学研究所助理研究員。のち、中央大学、金陵大学、復旦大学、中山大学教授を歴任。49年

## 【注】

- (1) 畢修勺の回顧文（1984）によると、この食事会の開催時は1935年の春だという。しかし、これは氏の記憶違いであると判断せざるをえない。畢は1934年11月末、

台湾省文献委員会に勤務、52年台湾大学教授、55年中央研究院民族学研究所研究員を兼任。71年退職。73年よりアメリカに定住。82年は大陸を訪問、91年泉州に定住、黎明学園客員教授に任じ、当地で死去。

- (5) 沈仲九 (1887-1968) 本名は沈銘訓、筆名は信愛、天心、平工。浙江省紹興の人。1905年日本留学、成城学堂に入学。07年帰国。12年紹興公報館に入り、16年『教育潮』を主催、同時に浙江省第一師範学校でも教える。20年上海へ、のちに湖南省第一師範学校へ。22年上海の中国公学中学部教員。23年上海大学中文学科教授。25年立達学園教員、同年3月『自由人』、9月『民衆』を創刊、秋に日本へ。27年5月帰国。約1ヶ月『革命週報』を主編、上海国立労働大学工学院院长に任じる。28年大学を辞し、ドイツへ留学。32年前後帰国。34年福建省政府参議。41年8月同政府主席陳儀が免職されると同時に重慶へ。45年10月台湾省行政長官署長官陳儀に従って台湾へ。47年5月解職された陳儀とともに上海へ。48年6月陳儀が浙江省政府主席に就任、その個人顧問に。49年2月、陳儀は共産党との関わりで囚われたが沈は難を免れた。55年上海市文史館館員。(呉念聖2010A) 参照。
- (6) フランス勤工儉学運動は、第一世界大戦終戦後、李石曾、呉稚暉、蔡元培などの提唱によって、中国の貧しい若者がフランスへ行き、働きながら学ぶという留学活動である。とくに1919、1920年の二年間はもっともブームで、そのなかから、のちに中国共産党などの政界指導者または科学者、翻訳家として各分野で活躍した人が輩出した。
- (7) 陳沢孚、陳宅桴とも。浙江省臨海の人。回浦高等小学教員。1920年5月勤工儉学生としてフランスに渡る。滞在中、アナーキズム雑誌『工余』や『勤工儉学週刊』の編集に参加。24年前後帰国。25年上海立達学院でフランス語を教える。立達学会会員。27年春、畢修勺との共訳『左拉(ゾラ)小説集』を出版。抗日戦争中、国民政府軍事委員会西南進出口物資運輸公司総工廠副総経理。新中国成立後、長春第一汽車工廠総工程師。
- (8) 朱洗 (1900-62) 浙江省臨海の人。生物学者。1920年5月勤工儉学生としてフランスに渡る。滞在中、アナーキズム雑誌『工余』の活動に参加、畢修勺主催『革命週報』にも寄稿。31年博士号を取得。32年帰国。35年北平研究院動物研究所研究員。37年上海へ生物研究所を設立、世界社『世界学典』編纂にも参加。39年クロボトキン『互助論』を翻訳出版。抗日戦争時期、上海で文化生活社の経営に協力、故郷臨海で琳山農業学校を創設。勝利後、上海生物研究所主任と台湾大学動物学科主任を兼任。新中国成立後、中国科学院実験生物研究所研究員、主任、所長を歴任。55年中国科学院学部委員。
- (9) 『時事新報』1920年5月9日による。ただそこに記さ

れているのは畢修勺の当時の名前である「畢脩爵」である。筆者はその記事を(張1980:720)から知る。

- (10) 陳延年 (1898-1927)、陳喬年 (1902-28) とともに陳独秀の子、安徽省懷寧の人。1919年初め延年はアナーキズム雑誌『進化』を主催、アナーキストの黄凌霜、区声白、鄭佩剛と交流をもつ。同年末、弟喬年とともに、フランスに渡り、22年初めアナーキズム雑誌『工余』を創設、のちに共産主義を信仰し共産党に入り、23年3月ソ連へ。延年は27年国民党政府に逮捕され処刑された。喬年は28年逮捕され処刑された。
- (11) 李卓、李卓吾とも。山西省運城の人。同盟会会員李岐山 (1878-1920) の子、翻訳家李健吾 (1906-82) の兄。1919年末、陳延年陳喬年兄弟とともにフランスに渡り、22年初めともに雑誌『工余』を創設。陳兄弟が共産主義に転向したのちに、その雑誌の中心人物となる。27年フランスに行った巴金と知り合う。同年帰国。畢修勺主催『革命週報』や自由書店関係の仕事をする。32年前後陝西省政府主席楊虎城將軍のもとで参議。新中国成立後、陝西省富平の炭鉱で統計員となる。
- (12) 羅承鼎 (1888-1972) 字は喜聞、筆名は魯漢。湖北省華容の人。辛亥革命、二次革命に参加。南洋や故郷の小中学校で教える。1918年湖北省のフランス勤工儉学運動に積極的に参加。20年末フランスに渡る。『工余』や『勤工儉学週刊』編集に参加。24年帰国。26年華容県教育局局長。27年5月長沙「馬日事変」後、上海へ労働大学労農学院事務課主任。畢修勺主催『革命週報』にも寄稿。29年浙江省政府設計委員会統計処主任。31年同省経済所所長。抗日戦争時期、国民政府軍事委員会政治部設計委員、行政院参議を歴任。42年初め、昆明で中仏大学訓導長兼文学院院长。46年湖南省南県私立湖西中学校校長。48年9月、北平研究院第二次学術会議社会科学組会員。新中国成立後、工業部教育顧問、工業部職員子弟温泉中学校校長。54年北京文史館館員。
- (13) 郭頌銘 (1899-1959) 浙江省の人。1920年11月フランスに渡る。同じ船に周恩来も。蚕桑学を学び、『工余』や『勤工儉学週刊』編集に参加。帰国後、浙江省蚕業繁殖場長、蚕業管理委員会副主任を歴任。新中国成立後、同省蚕業改進所副所長、省蚕種公司經理、蚕業学会副理事長などに任じる。59年批判を受け、同年死去。80年名誉回復。
- (14) 段振寰、段君妄や段慎修とも。湖北省華容の人。1920年末、羅承鼎らとともにフランスに渡る。『工余』や『勤工儉学週刊』編集に参加。23年末、パリで中国青年党創立に参加、党の中央委員、内務部長などを歴任。
- (15) 曾向午または曾向五。1919年8月勤工儉学生としてフランスへ。滞在中、巴爾叙伯中国同学会代表になったことがある。『工余』編集に参加。帰国後、張家口で馮玉祥が出資した西北汽車公司工場長に任じる。その後西北公路局局長。1930年代中期上海在住。1940年代

- 末台湾で死去したか。
- (16) 魯漢つまり羅承鼎は『革命週報』第68期から87期まで19回連続で「我在留仏勤工儉学生活的一段」を、続編として第99期から105期まで7回連続で「未去仏国勤工儉学以前」を発表している。筆者はそのうちの数篇を読んだ。『勤工儉学週刊』のことは第84期による（坂井：1994第6巻119-124）。
- (17) ジャン・グラヴ（1854－1939）フランスのアナキスト、理論家。クロボトキンと関係が親密、その名は中国で早く知られ、中国人アナキストとの交流が多い。
- (18) 大杉栄と中国人アナキストたちとのこの会見は、（大杉2009：439-440）にも書かれている。
- (19) 鄭佩剛（1890－1970）筆名は克勞。広東省中山の人。兄鄭彼岸は師復の親友、妻無等は師復の妹。みな晦鳴学舎メンバー。アナーキズム雑誌『晦鳴録』（のちに『民生』と改名）、『労働』、『華星』（エスペラント月刊）、『国民通訳』、『進化』（陳延年主編）、『正報』、『緑光』（『華星』の復刊名）、『時代前』月報などの出版発行に携わる。1925年春上海北四川路で出版合作社を創設、26年冬、江湾永義里（立達学園構内）に移転、32年初めの上海事変の砲火によって幕を引く。
- (20) 豊子愷（1898－1975）浙江省桐郷の人。画家。1912年浙江省第一師範に入学、李叔同に師事。21年日本留学、西洋画や音楽を学ぶ。帰国後、美術と音楽の仕事に従事、24年漫画を描き始める。25年、匡互生などと立達学園を創設。60年上海中国画院設立時の院長。
- (21) エルゼ・ルクリュ（Elisée Reculs 1830－1905）伯爵家に生まれる。フランスのアナキスト、理論家、人文地理学者。
- (22) 呉克剛（1903－99）字は君毅、安徽省寿州の人。1922年中国公学中学部卒業。23年、ロシア盲目詩人エロセンコを付添い、上海から北京へ、魯迅、周作人兄弟の家に住む。24年3月、師沈仲九とアナーキズム雑誌『自由人』を創刊。25年フランスへ留学。27年秋帰国。30年泉州の黎明高級中学校長。のちに河南省百泉鄉村師範学校長。34年福建省政府諮議。37年『戦時経済叢書』を文化生活出版社より出版。38年武漢へ『掃蕩報』編集。45年台湾行政長官公署参議。46年10月台湾省図書館館長。48年9月、北平研究院第二次学術会議社会科学組会員。55年4月より台湾大学教授、のちに中興大学教授。
- (23) 呉稚暉（1865－1953）稚暉は字で、名は敬恒。江蘇省武進の人。日本留学中、同盟会に参加。フランス勤工儉学運動に従事、中仏大学を創設、国語改革提唱。1926年6月広州で開かれた国民党共産党両党連合会議の国民党代表、「党務整理案」を担当、国民党内の共産党員排除を出張。46年国民政府憲法作成代表主席。1949年台湾へ。
- (24) 華林は呉稚暉らと一緒にフランス勤工儉学運動を推進し、アナーキズムを鼓吹してきたアナキストである。彼は『時事新報』に文章を寄せ、呉の国民党寄りの行動に不満を吐露した。呉はそれに答える形で自分の意見を公開した。
- (25) 例えば、1926年10月1日『民衆』第14、15期合刊号所載、賈維「呉稚暉的無政府主義」（葛1984下：790-794）、25年7月『自由人』第5期所載、信愛（沈仲九）「無政府主義者可以加入国民党嗎？－呉稚暉の荒謬絶倫的議論」（無政府主義者は国民党に入ってよいのか－呉稚暉の荒唐無稽な観点）、鉄鳥「無政府主義与国民党」（葛1984：763-789）
- (26) 60年後ではあるが、台湾にいる呉克剛は彼の回顧文において多くの箇所、蒋介石の当時の共産党粛清クーデターに批判している。（呉克剛1999：63；120；149；157）
- (27) 『平等』月刊の発行地はアメリカサンフランシスコ、1927年7月1日に創刊され、計3巻23期、第1巻計13期、1929年1月から第2巻、8期と9期の合併号まで、1931年10月から第3巻、1期のみ。
- (28) 李石曾（1881－1973）石曾は字、名は煜瀛。直隸（今の河北）省高陽の人。1902年フランス留学、生物学を学ぶ。アナキスト。06年、世紀社を創立。同年同盟会に参加。11年辛亥革命のために帰国。二次革命失敗後、フランスへ。17年、北京大学生物学科教授。同年呉稚暉、蔡元培らと留仏勤工儉学運動を始める。24年国民党第一回大会で中央監察委員。26年故宫博物院院長。27年労働大学の創立に関与。29年北平研究院院長。抗日戦争中、外交活動に励む。48年総統府資政。49年スイス、バラクェなどへ。56年台湾に定住。
- (29) 匡互生（1891－1933）湖南省邵陽の人。1916年北京高等師範学校に入学。19年五四運動に参加。20年卒業後、湖南省第一師範学校教務主任となる。その後中国公学、春暉中学で教える。24年初め立達学園を創設、その中心人物となる。27年の労働大学創設にもかかわる。
- (30) 陸翰文（1890－1948）浙江省臨海の人。1907年光復会に参加。13年回浦高等小学校校長。17年軍閥の指名手配から逃げ、上海へ經由して日本へ、士官学校に進学。20年帰国後、回浦小学を主催、さらにそれを中高校まで発展させた。27年国立上海労働大学の創設にもかかわる。
- (31) 労働大学は国立大学で、1927年5月9日、新しい南京政府により開校が決定され、9月に労工学院が開学され、翌春労農学院を開学したが、32年6月に解散した。
- (32) 畢修勺は『革命週報』に発表するときに、多くの筆名を用いた。ここで挙げた筆名は、彼の『革命週報』掲載論文をまとめた単行本『一個貧農子的話』（1928）に見られる。
- (33) 現在、『革命週報』本文をもっとも多く収めた資料集

- は(坂井1994)第1～6巻である。ほかに(葛1984)も数篇所収される。なお、畢修勺掲載文全リストは(呉念聖2012)参照。他の主な出稿者は、近墨、景明、愛安、式光(1919年渡仏、湖南人)、天祥(1919年渡仏、27年帰国—李卓か)、朱洗、魯漢(即羅承鼎)など。
- (34) 原文未見。この日本語訳文は(山口2008)による。
- (35) 巴金は個人的に李石曾に憎んでいるのではないようである。(陳阜2001:53)によると、1946年6月4日に李が畢修勺らに出した書簡に「巴金兄亦請同來」(巴金さんも一緒に来てください)が書いてある。これは両者の往来が存続しているという一証拠になる。
- (36) 黄子方(1900-76)雲南省玉溪の人。1924年来日。東京高等師範に入学。在日中、同郷の張景を通じて沈仲九、衛惠林、呉朗西及び石川三四郎・山鹿泰治・武良二らと知り合う。石川三四郎『西洋社会運動史』を翻訳。28年春帰国、翻訳原稿を自由書店にいる友人荘重に渡した。その後、自身も同書店に働くこととなる。31年夏、故郷雲南にもどっていた黄はドイツから帰国した沈仲九の手紙を受け、泉州の黎明高級中学図書館に勤務する。数ヶ月後、上海に行き衛惠林、巴金が主宰する『時代前』の編集に協力。32年初め、前年10月に呉朗西と一緒に日本から帰国した伍禪と週報『弗尼達姆freedom』を発行したがまもなく発禁処分を受ける。その後、南京へ行き友人の衛惠林や張易らに会って故郷に帰り、玉溪县教育局長、同県立中学校教導主任、校長、県立簡易師範学校長、46年広文学校を創設。新中国成立後、玉溪中学校長。56年県政治協商会議副主席。
- (37) 畢修勺は急いで南京に行き、南京滞在中のアナーキストの大先輩である景梅九(1882-1961)を通して、彼と親交のある、南京政府高官李烈鈞(1882-1946)に頼み、李が淞滬警備司令部に電報を打ち、それで黄がやっと釈放されたようだ。
- (38) 自由書店の役割を受け継いだのは平明書店である。1935年8月、巴金が文化生活出版社編集長に就任してから、クロボトキンらアナーキズム関係の専門書を編集出版する際に、大概平明書店という名前を使うが、実際の販売元は文化生活出版社である。ただ、1949年12月、巴金の弟李采臣が創立し、巴金が編集長を務める平明書店は上記の平明書店とは異なり、実体のある出版社である。
- (39) 呉朗西(1904-92)は四川省重慶の人。1923年中国公学中学部卒、呉克剛の一年後輩、同じ沈仲九の学生であった。25年日本留学、上智大学でドイツ文学を専攻。31年満州事件後、卒業を直前にして帰国。まとめた「歌徳伝記」(ゲーテ伝記)という原稿を巴金を通して『小説月報』社に渡したが、32年上海事件で砲火に消失。立達学園、泉州平民中学で教え、上海で『美術生活』や『漫画生活』を編集したのち、文化生活出版社を創設。新中国成立後、ずっと出版部門にいた。
- (40) 馬宗融(1892-1949)四川省成都の人。1919年から25年までフランスに留学。帰国後、上海でフランス文学の翻訳に従事。29年9月再度フランスへ、リヨン中仏大学(Institut Franco-Chinois de Lyon)で秘書に就任する。33年秋帰国、復旦大学教授。36年広西大学へ。抗日戦争中、重慶で四川大学、復旦大学で教鞭をとる。抗日戦争後、復旦大学とともに上海にもどる。47年秋台湾大学へ。49年2月病気で上海に戻り、まもなく病死。訳書『春潮』などは文化生活出版より刊行。羅世弥(1903-1938)筆名は羅淑。原籍は四川省の簡陽、成都に生まれる。23年成都省立第一女子師範学校に入学。29年9月馬宗融とともにフランスへ。31年リヨン中仏大学文科に入学。33年帰国、上海立達学園農村教育科でフランス語を教え、小学部主任に任じる。36年馬宗融とともに広西へ。37年四川へ。著書『生人妻』などは文化生活出版社から刊行。
- (41) 許既吾は1920年代初めフライスへ。フランス滞在中、キリスト青年会の活動に参加。1930年代上海で工場を経営。著「一個人的責任」(『進化』第2期)。朱洗訳『互助論』(平明出版社)の校閲(巴金1939年6月18日前記による)。38年2月畢修勺と一緒に武漢へ。のちに昆明へ。抗日戦争勝利後、文化生活出版社刊『少年読物』復刊第1、2期に「地下之富源」を、第6期に「珀臘系嫡(Plastics)」を発表している。
- (42) 陳誠(1898-1965)浙江省青田の人。北伐戦争のとき、第1軍の団長であった。蒋介石に重用され、1938年軍事委員会政治部長、武漢衛戍総司令に任じる。47年2月1級陸軍上將。台湾に行った後、副総統。畢修勺との関係は(呉念聖B2010)参照。
- (43) 『掃蕩報』の前身は1931年3月国民政府軍事委員会南昌行營政治訓練處處長賀衷寒がつくった『掃蕩3日刊』である。32年6月23日『掃蕩報』に改名。35年漢口に移転。38年1月、国民党軍事委員会政治部に帰属される。ソ連政府と中国共産党の意見を受け入れて改組、畢修勺が編集長となる。同年10月1日重慶版が開始、10月25日漢口版が停止、12月25日桂林版が開始。1939年5月6日から8月12日まで重慶版は『重慶各報聯合版』に加入。42年6月1日から43年3月31日まで『中央日報』と聯合版。45年11月12日『和平日報』に改名、南京版を開始。49年4月23日台湾に移転、7月1日『掃蕩報』に回復。50年7月7日終刊。
- (44) 1985年5月に畢修勺が書いた文章に「私のこの四十年のうち、二十五年は入獄、労働改造、保護観察などの迫害を受け、残った十五年は二十数冊のゾラ小説しか訳していない——そう思うと本当に悲しい」(1988:65)と言っている。だが、それからの約17年間、彼は大量の翻訳をした。詳細は(呉念聖B2011)参照。

【参考文献】

- 大杉豊. 2009. 『日録・大杉栄伝』 社会評論社.
- 葛懋春・蔣俊・李興芝編. 1984. 『無政府主義思想資料選』 下. 北京大学出版社.
- 吳克剛. 1999. 『一個合作主義者見聞録』（非売品）中国合作社.
- 吳念聖A. 2010. 「第三世代中国人アナキストの中の日本留学組——沈中九を中心に」 早稲田大学総合研究機構『プロジェクト研究』5: 55-69.
- 吳念聖B. 2010. 「畢修勺と陳誠」 中央文史研究館・上海文史研究館編『世紀』4: 50-53.
- 吳念聖. 2012. 「畢修勺年譜」『巴金研究集刊』7. 上海三聯書店.
- 吳朗西. 1982. 「文化生活出版社の創建」『新文学史料』3: 194-197（青谷政明訳. 1983. 「文化生活出版社の創立について」中国研究所『中国研究月報』2: 24-29）.
- 坂井洋史・嵯峨隆編、解題. 1994. 『原典中国アナキズム史料集成』（影印版）第1～12巻. 緑蔭書房.
- 坂井洋史・嵯峨隆編. 1994. 『原典中国アナキズム史料集成』別冊（解題、総目次） 緑蔭書房.
- 嵯峨隆・坂井洋史・玉川信明編訳. 1992. 『中国アナキズム運動の回想』 総和社.
- 蔣俊・李興芝. 1991. 『中国近代の無政府主義思潮』 山東人民出版社.
- 陳思和. 1992. 『人格の發展—巴金伝』 上海人民出版社.
- 陳阜. 2001. 「一对人生難得的摯友——記朱洗与畢修勺」 中央文史研究館・上海文史研究館編『世紀』2: 50-53.
- 張允侯・殷叙彝・李峻晨. 1980. 『留法勤工儉学運動』（1） 上海人民出版社.
- 巴金. 2000. 「答誼我者書」（1928. 4. 発表）『巴金全集』18: 176-180 人民文学出版社.
- 畢修勺. 1928. 『一個貧農子の話』 自由書店.
- 畢修勺. 1984. 「我信仰無政府主義的前前後後」（1982. 5. 執筆）葛懋春（1984: 1022-1038）. 坂井洋史訳「無政府主義になった頃のこと」（嵯峨1992: 426-447）.
- 畢修勺. 1988. 「我這四十年」（1985. 8. 執筆）泉州平民中学・晉江民生農校校友会編印『懷念集』4: 58-65.
- 畢修勺. 1999. 「我任掃蕩報總編輯的始末」（1984. 5. 執筆）『檔案与史学』2. 同じ文章は2000. 『新聞大学』3: 66-69にも所載.
- 山口守. 2008. 「巴金とエマ・ゴールドマン（3）」『トスキナア』7: 44-49.